新教育課程の実践上の諸問題

――「総合化」をめざした「国語Ⅰ」の指導を中心に――

菅原敬三

はじめに

本年度の光葉会の研究協議会の題目は、「新教育課程の実践上の諸問題」というものである。本校の国語科に、問題提起の要請があったのは、昭和五十四年度から積極的に「国語Ⅰ」への取り組みを実践してきているからであろう。しかし、過去三年間の実践の総括は、昨年度の研究協議会(「国語Ⅰ」のあり方を求めて――「国語教育研究、第二七号」に収録)において、本校の世羅博昭教官から詳しい報告はなされている。昨年度に重ねて本年度もという要請は、とりもなおさず昭和五十七年度の実践の報告をまとめて報告せよということであろう。重複するが、過去三年間の「国語Ⅰ」の取り組みの概略を説明し、そして、本年度の取り組みを述べることで、「新教育課程実践上の諸問題」の提案にかえたい。

一　本校の基本的立場

我々は、「国語Ⅰ」の性格を次の五つにまとめた。

1、国語の基礎的・基本的能力を身につける科目である。

2、「表現」「理解」「言語事項」の二領域一事項より構成されている。

3、中学校国語との関連を密接に持った科目である。

4、第一学年において全員が履習する科目である。

5、現行の「現代国語」と古典に関する科目の基本的な内容を整理し構成された総合的な科目である。

「現代国語」と古典に関する科目を総合的に学習することについては、賛否両論あるところである。しかし、高等学校への進学率が九〇パーセントを越え、しかも古典を学習する意義が問い直されている現状を踏まえての学習指導要領の改正であれば、その趣旨を最も生かし得る方法はどうあるべきかを考えるべきであろう。つまり、基礎・基本を問い直すことによって、学習者の負担を軽減し、しかも学習意欲を喚起する方法はどうあるべきかを問われていることになる。

そこで、「国語Ⅰ」に取り組む姿勢を、本校八人の教官が討論を重ね、次のようにまとめたのである。

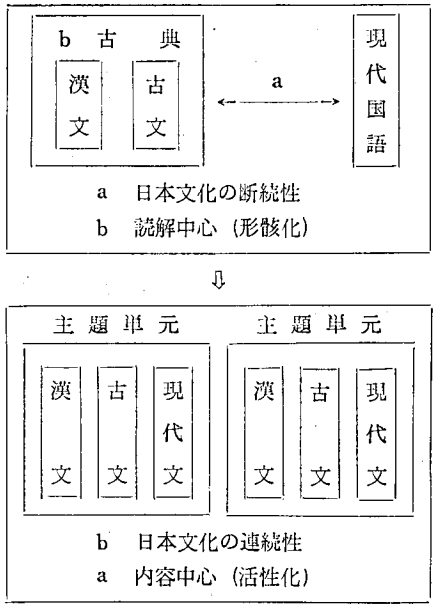
1、「国語Ⅰ」の性格上、現代文・古文・漢文を総合的に学習することが望ましい。

2、「国語Ⅰ」の総合化は、一単元の中に現代文・古文・漢文を含むことによって効果的に達成される。

3、単元の構成は、主題を軸にしたものが望ましい。いわゆる主

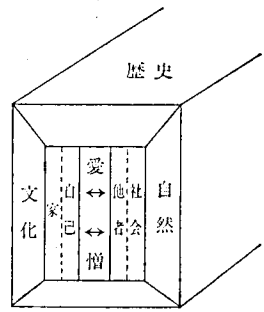
題単元で、ある一つの主題のもとに、現代文・古文・漢文を総合的に学習する方が、ジャンル単元や技能単元よりも効果的である。

すなわち、「主題単元による、現代文・古文・漢文の総合化を図る」というのが、本校の基本的立場である。このような立場で「国語I」に取り組めば、日本文化を過去から現在へと連続してとらえることができるばかりでなく、古典の学習を生き生きとよみがえらせることができると考えたのである。学習者の思考および認識の拡充と深化が図れるというのを、最大のメリットとしたのである。それを模式的に図示すれば、次のようになる。



二 主題の検討

次に、どのような主題を設定するのが適当か、かなりの時間をさいて検討した。いろいろな角度から意見を出し合い、次の図式におちついた。



過去から未来への人間の営為――「歴史」――の流れを、現在という時点で裁断すれば、大きく「自然」と「文化」というものが考えられる。そして、全的なものとして、「社会」・「他者」を想定し、それに対する個的なものとして「家」・「自己」を想定した。また、その中を細く検討して、次の十の主題を設定した。

「自我」「愛」「旅」「戦争」「社会」「文化」「芸術」「言語」「歴史」「自然」。

なお、「文化」は、科学・芸術・風俗習慣・ことばなどに細分され、「社会」は、社会機構や戦争・平和などに細分されるものである。

三　過去三年間の実践的研究の概略

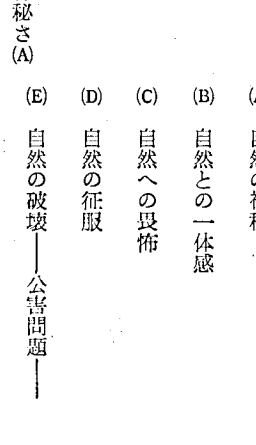
(1)　昭和五十四年度の試み

以上の検討を経た上で、実践研究を進めることになった。最初に取り上げた主題は「自然」である。「自然」を取り上げた理由は次のとおりである。

1、人間・社会を大きくつつみ、あるときはそれらをはぐくみ、あるときは相対するものであり、人間の原点ともいいうる存在である。

2、だれもが日ごろ接していて親しみやすく、とりつきやすい。それでいて、探究の及んでいない面も多々あると思われる。

3、今日的課題であり、学習者にとっても興味関心が大きく、かつ問題意識も強いと思われる。学習者（指導者も含めて）の現状認識から出発し、いわゆる〝ゆさぶり〟という過程を経て、再認識へと発展し得る。



(A)　自然の神秘

(B)　自然との一体感

(C)　自然への畏怖

(D)　自然の征服

(E)　自然の破壊――公害問題――

次に、どのような角度から「自然」に切り込むかの検討に入り、上図のような分析の結果、(A)から(E)までの五つに整理し、四つの班が単元「自然」に取り組んだ。

①「自然への回帰」（古文・漢文）……長谷川・竹本グループ

②「自然と人間の諸相」（現代文・古文・漢文）……小山

③「自然観の断絶」（現代文・古文）……堀(泰)・菅原グループ

④「日本人の自然観とその課題」（現代文・古文・漢文）……堀(芳)・世羅グループ

詳しくは、「『国語Ⅰ』の実践的研究(1)――単元「自然」の場合――」（本校「国語科研究紀要」第十一号）を参照されたい。

単元を組むに当って、最も配慮したのは、教材の発掘と単元の構成であった。月二回の勉強会の席で、「単元設定の趣旨」や「教材の配列」など、国語科教師八名で検討を加え「単元構成表」を作っていった。次に単元構成表の一例を示す。（次ページ参照）

(2)　昭和五十五年度の試み

第二年次は、単元「愛」を取り上げ、四つの実践を行った。「愛」についての切り込み方や単元構成は、昨年度と同様である。

①「愛――出合いと別離と――」（現代文・古文・漢文）……長谷川・堀(泰)グループ

②「私の考える愛のすがた」（現代文・漢文）……山本

③「愛――戦いの庭で――」（現代文・古文）……堀(芳)

④「状況と愛の姿」（現代文・古文）……菅原

詳しくは「『国語Ⅰ』の実践的研究(2)――単元「愛」の場合――」（本校「国語科研究紀要」第十二号）を参照されたい。

単元名	自然 ——自然と人間の諸相——
単元設定の趣旨	太古以来、人間は自然にはぐくまれて進展してきた。現代にあって、科学文明が自然を征服したと考えるのは、思い上がりであろう。人間と自然のこれからのかかわりを見定めるためには、その諸相を明らかにしなければならない。
対象学年	2
配当時間	25

指導計画

次	教材	領域	時間	目標	指導者	教科書
1	孟浩然「春暁」 杜牧「江南春」	漢文	3	二つの漢詩に共通した、春の情趣とそれに融合した作者の心情を読みとり、自然と人間の一体化をとらえる。	小山	第一学習社「漢文上」
2	「源氏物語」(夕顔)	古文	3	〝夕顔〟の死の場面における、もののけの無気味さや闇のおそろしさを読みとり、自然に対する人間の畏怖の念に目をひらく。	小山	三省堂「新版古文下」改訂版
3	柳田国男「遠野物語」 井上靖「幼き日のこと」	現国	1.5	「遠野物語」の第八話〜第一一話、「幼き日のこと」の〝山火事〟を通読し、自然に対する人間の畏怖の念を確かにする。	小山	プリント
	*単元設定の説明		0.5		小山	
4	風巻景次郎「北海道の秋」 宮脇昭「幻の森」	現国	4	現代における、自然破壊(公害)や自然保護の問題を取り上げ、自然に対する人間の働きかけを考える。	教育実習生	三省堂「新版現代国語」改訂版
	杜牧「山行」岑参「磧中作」 范大成「晩春田園雑興」	漢文	4	三つの漢詩それぞれに歌われた、情景や心情の特色を浮き彫りにし、自然と人間のかかわりのパターンを広げる。	教育実習生	第一学習社「漢文上」
	「源氏物語」(夕顔) 「新古今和歌集」	古文	4	〝夕顔〟の死の場面をイメージ化するとともに、和歌の世界にみられる自然と人間の一体化にも気づく。	教育実習生	三省堂「新版古文下」改訂版
	*単元のまとめ 1		1		小山	
5	柳田国男「豆の葉と太陽」	現国	3	おもに東北地方の大豆畠の美しさに着目し、〝風景を植える〟という立場から、自然に対する人間の働きかけを実感する。	小山	プリント
	*単元のまとめ 2		1		小山	

(3) 昭和五十六年度の試み

第三年次は、「自然」・「愛」を除いた八つの主題単元を、それぞれ担当者を決めて分担した。

①「芸術――制作と享受――」（現代文・古文）……菅原
②「ことば」（現代文・古文・漢文）……山本・竹本グループ
③「歴史――時代に生きる人々――」（現代文・古文・漢文）……長谷川・世羅グループ
④「自我――少女たちの心――」（現代文・古文）……堀（泰）
⑤「戦争と人間――庶民の課題――」（現代文・古文）……世羅
⑥「文化――年中行事――」（現代文・古文・漢文）……小山
⑦「社会とひと」（現代文・古文・漢文）……山本
⑧「旅のこころ」（現代文・古文・漢文）……堀（芳）

なお、①・②・③・④は実際に授業を行い、⑤・⑥・⑦・⑧は単元計画の細案を立てるにとどめた。

単元計画の一例を紹介する。

単元名	対象学年	配当時間
愛 状況と愛の姿――	2	7

単元設定趣旨：古来、人間は愛に喜び、愛に泣いた。不変の愛と互いに信じていながらも、状況の変化によって破局を迎えなければならない愛もある。状況と愛の姿のかかわりを考えることによって男女の愛について考えてみたい。

指導計画						
次	教材	領域	時間	目標	指導者	教科書
	単元設定の説明		0.1	単元設定の理由や授業構想を理解する。		
1	大和物語 一四八段（芦刈） 伊勢物語 二四段（梓弓）	古文	1.9	芦刈 一組の夫婦が離別してゆかねばならぬ状況を理解し、それがどのようにそれぞれの心理に影響を与えていったか考える。 梓弓 一人で残された女の心理を想像させ、状況の変化によって女の心理の移りゆきを理解する。	菅原	プリント
1		古文	1			
2	伊藤左千夫「野菊の墓」	現国	3	政夫と民子の愛が、許されぬ状況にあることを理解し、愛のあり方を考える。	菅原	文庫本
3	単元のまとめ		1	全学習を終えて、状況と愛のかかわりについて、どのように考えるようになったかをまとめる。	菅原	

四　本年度の試み

過去三年間の取り組みは、「国語Ⅰ」の趣旨を最も生かし得る方法を求めて行われてきたものであった。課題もあるが（「国語教育研究、第二十七号所収、「国語Ⅰ」の実践的研究――「総合化」をめざして――世羅博昭の項参照）、我々が当初想定したとおり、学習者に思考・認識の拡充・深化をもたらし、合わせて古典学習の活性化を得ることができたように思う。

ところで、本年度から実施される「国語Ⅰ」の教科書が、十三社から十七種類刊行されているが、その教科書を使って我々がめざす「総合化」に近づけてみようとするのが、本年度の試みである。

まず、刊行された十七種類の教科書を分類してみると、次の三つの型にまとめられる。

A型　現代文編／古文編／漢文編　（1）

B型　現代文／古文／現代文／漢文……（15）

C型　現代文・古文・漢文／現代文・古文・漢文……（1）

（括弧内の数字は、それぞれの型に該当する教科書数を示す。）

A型とB型とは、それぞれ「現代文」・「古文」・「漢文」の学習を通して、結果として三者の「総合化」をはかろうとするもので、新学習指導要領の趣旨を十分に生かしたものとは言い難い。また、C型に属している教科書は、ジャンルを中心に「総合化」をはかったものである。

そこで、我々の考える「主題単元による総合化」を、新しく刊行された教科書を利用してめざしてみようということになった訳である。本年度の取り組みの一覧表を示すと次のとおりである。

	教科書単元構成	指導の実際
1組	三省堂「新国語」ジャンル	一人主題 ／ 現・古・漢主題
2組	明治書院「基本国語Ⅰ」ジャンル＋主題	二人〈現・古・漢主題 ／ 現（主題）古・漢（主題）まとめ ／ 現（主題）古・漢（主題）まとめ
3組	第一学習社「高等学校国語Ⅰ」ジャンル	二人〈現・古・漢ジャンル＋主題 ／ 現（ジャンル）古・漢（ジャンル＋一部主題） ／ 現（主題）古・漢（主題）
4組	学校図書「高等学校国語Ⅰ」ジャンル	一人・ジャンル・主題・ジャンル＋主題 ／ 現・古・漢（ジャンル） ／ 現・古・漢（主題） ／ 現・古・漢（ジャンル＋主題）
5組	右文書院「高等学校国語Ⅰ」ジャンル	一人ジャンル＋主題 ／ 現・古・漢（ジャンル＋主題） ／ 現・古・漢（ジャンル＋主題）

一組は、本校が作成した十の主題単元を中心にした（一部教材の差し替えはあるが）取り組みである。

二組は、一組と同様、主題単元を軸としているが、教科書（主に「国語Ⅰ」の教科書）に採録された教材を極力利用する取り組みである。

三組は、現代文と古典をそれぞれの授業担当者が分担し、学期に一つの主題単元を組むもの。

四組は、ある単元はジャンル、またある単元は主題で、また別の単元はジャンルに主題を組み合わせて、さまざまな取り組みをするもの。

五組は、ジャンルで構成されている教科書に主題を持ち込み、全ての単元をジャンルに主題を組み合わせたもの。

また、本年度の試みには、一組から五組までそれぞれのクラスにおいて、「年間指導計画案」と「一学期の指導計画細案」を用意することができた。その一端を紹介する。

年間指導計画案

学期	単元名	時数	理解 現代文	理解 古文	理解 漢文	表現 書くこと・話すこと
一	一、入門 —古典学習のために	5		○「児とかいもちひ」（宇治拾遺物語） ＊古語辞典の引き方 菅原 説話 3	△「守株」（韓非子） ＊漢和辞典の引き方 長谷川 故事 2	
	二、自然 —調和と融合 12		△「自然への回帰の旅」（辻邦生） 菅原 随想 4	○「春はあけぼの」（田中澄江） ○「五月の山里」（枕草子） 菅原 解説 随筆 2 1	○「春暁」（孟浩然） △「尋胡隱君」（高啓） △「鹿柴」（王維） ＊「絶句」（杜甫） 長谷川 漢詩 1 1 1 1 1	自然の中に生きる（話し合い） 1

単元	時数	教材	担当	種別	配当
三、旅 ―孤独と内省	13	「旅」について思うこと（感想文）			1
		○旅―「自己の新発見」（広中平祐）	菅原	随想	2
		*「旅上」（萩原朔太郎） *「旅装」（立原道造） *「岬・千里浜」（三好達治）	菅原	詩	1.5 1.5
		○「あづま下り」（伊勢物語）	長谷川	物語	3
		△「除夜作」（高適） *「九月九日憶山東兄弟」（王維） *「夜雨寄北」（李商隠）	長谷川	漢詩	1 1 1
		単元「旅」を終えて（感想文）			1
（教育実習） 四、芸術 ―制作と享受	13	○「美を求める心」（小林秀雄）	菅原	評論	4
		*「嵯峨野明月記」（辻　邦生）	菅原	小説	4
		△「絵仏師良秀の家の焼くるを見て悦ぶこと」（宇治拾遺物語）	長谷川	説話	2
		○「画龍点睛」（太平広記） *「伝神写照」（世説新語） △「推敲」（唐詩紀事）			1 1
		私の考える芸術（意見文）			1
五、作文 ―読書感想文を書く	6	○読書感想文の書き方 文学作品を読む 読書感想文を書く 推敲・清書 文集編集	菅原		1 2 2 1

二

単元	時数	教材・学習活動	担当	ジャンル	時間
六、歴　史 ―時代に生きる	16	△「野麦峠」（山本茂美）	原	小説	5
		△「安井夫人」（森鷗外）	菅	小説	4
		△「花山院の出家」（大鏡）	長谷川	物語	3
		○「鼓腹撃壌」（十八史略）	長谷川	史話	3
		「伝記〇〇」を読んで（感想文）			1
（教育実習）七、戦　争 ―苦しみと憤りと	18	△「黒い雨」（井伏鱒二）	原	小説	6
		△「戦中日記」（高見　順）	菅	日記	4
		△「義仲最期」（平家物語）	長谷川	物語	4
		△「兵車行」（杜甫）	長谷川	漢詩	3
		「戦争体験を聞く」			1
八、愛 ―喜びと嘆き	18	○「レモン哀歌」（高村光太郎）	原	詩	2
		○「バッタと鈴虫」（川端康成）	原	小説	4
		○「父と子の手紙」（岡本一平・太郎）	菅	手紙	4
		○「筒井筒」（伊勢物語）	長谷川	物語	2
		△「帰京」（土佐日記）	長谷川	日記	2
		*「問孝」四章（論語）	長谷川	思想	1
		○「送友人」（李白）	長谷川	漢詩	1
		○「月夜」（杜甫）	長谷川	漢詩	1
		「愛」とは何か（話し合い）			1
九、作　文 ―手紙文を書く	8	○手紙の書き方	原		1
		手紙文を読む・検討	原		2
		手紙文を書く	菅		4
		推敲・清書	菅		1

第一学期指導計画細案

単元名	単元の設定趣旨	配当時間
二、自然 —調和と融合	古来、自然は人間に対してさまざまに働きかけ、人間もまた自然に対してさまざまな働きかけをしてきた。この両者の働きかけを通して、自然と人間とが調和し、融合するところに、両者の望ましい関係があることを理解させ、自然の中に生きることの意義を考えさせる。	12

三

一〇、言葉 —場面と状況	二、自我 —生き方をみつめる	三、作文 —意見文を書く
15	15	5
△「言葉の力」（大岡信） 菅原 説明 3	△「或る朝」（志賀直哉） △「山椒魚」（井伏鱒二） 菅原 説 小説 4 4	
*「くらげの骨」（枕草子） *「尊かりけるいさかひ」（徒然草） 長谷川 随筆 2 1	△「漂泊の思ひ」（奥の細道） ○「ゆく川の流れ」（方丈記） 長谷川 随筆・紀行 1 2	
○格言・成句 ○「仮虎威」（戦国策） 長谷川 史話 2 2	○「采微之歌」（十八史略） △「子在川上曰」章（論語） 長谷川 史話 思想 2 1	
1	1	1
		○意見文の書き方 意見文を読む・検討 意見文を書く 推敲・清書 菅原 1 2 1 1

「生きた言葉」（意見文）

△「言葉の里帰り」（唐木順三）
菅原 説明
4

「自己をみつめる」（感想文）

次	1	2			
教材	「自然への回帰の旅」（辻邦生）	「春暁」（孟浩然）	「尋胡隠君」（高啓）	「鹿柴」（王維）	「絶句」（杜甫）
領域	理解	理解			
	現代文	漢文			
	随想	漢詩			
時数	4	1	1	1	1
目標（内容）	1、自然と人間との望ましい関係をとらえさせる。 2、筆者の自然を見る目の特色をとらえさせる。 3、筆者の主張・考え方を明らかにさせる。	1、春の暁の様子をとらえさせる。 2、春に対する作者の思いを考えさせる。	1、「隠君」の意味内容を明確にさせる。 2、「到君家」までの情景をとらえさせる。 3、自然と一体化している作者の心情をとらえさせる。	1、静寂な「鹿柴」の世界を読みとらせる。 2、「鹿柴」の場を絵画化させる。	1、のどかな春の情景を読みとらせる。 2、作者の心情・境遇を想像させる。
目標（技能）	1、文章の要旨を叙述に即して、的確にとらえさせる。 2、筆者のものの見方・考え方をとらえさせる。	1、句法に注意させる。 2、主・述の関係を明らかにさせる。 3、転句の働きを考えさせる。	1、反復表現のねらいを考えさせる。 2、対句表現による詩的効果を考えさせる。	1、構成の巧みさに気づかせる。 2、すぐれた表現を味わわせる。	1、春をうたう素材を抜き出させる。 2、一詩対句構成であることに注目させる。
言語事項	○語句の意味・用法 ○文末表現	○訓読のきまり ○語順・句の組み立て ○語句の意味、暗誦	○訓読のきまり ○語句の働き ○名詞の羅列 ○暗誦	○語句の働き ○韻字 ○暗誦	○返り点の法則性 ○漢詩のきまり ○暗誦
導者	菅原	川谷			長
出典	教△科書	教科書	教△科書	教△科書	「杜工部集」

3	「春はあけぼの」（田中澄江）	理解	古文	解説	1	1、四季それぞれの特色を述べた作者の鋭い感覚をとらえさせる。 2、「枕草子」第一段に対する解説者の評価を通して、自然と人間との関係を理解させる。	1、問題・事がらの取りあげ方をとらえさせる。 2、すぐれた表現を味わわせる。	○文・文章の組み立て ○語句の意味・用法 ○体言止めの効果	原	教科書
	「五月の山里」（枕草子）			随筆	2	1、五月の山里を歩く筆者の喜びを理解させる。 2、喜びの由ってくる所をとらえさせる。 3、作品の背景をなしている風俗・習慣を理解させる。	1、作者の感動の焦点・ありかをとらえさせる。 2、全体の雰囲気をとらえさせる。	○古今異義語 ○語句の意味・用法 ○文語のきまり	菅	教科書
4	話し合い「自然の中に生きる」				1	1、単元「自然」を終えて感じたことを話し合わせる。 2、自分と自然とのかかわりを話し合わせる。	1、結論と説明とをはっきりと区別させる。 2、他人の意見に対して自分の意見を持たせる。	○語尾の明瞭 ○大きい声	菅原・長谷川	

（年間指導計画案の教材の配列は、そのまま授業の展開を示す。従って、一単元内では右から左へ授業が展開する。教材が縦に並んでいるところは、それぞれの担当者の授業が並行して行われていることを示す。

なお、教材の上に付いている記号は、次のことを示している。

○……担当のクラスで使用している教科書に収録された教材

△……他の教科書に収録された、また収録されたことのある教材

＊……持ち込み教材

おわりに

四年間に及ぶ「国語Ⅰ」の実践的研究の概略を紹介してきたが、「国語Ⅰ」への取り組み一つを取り上げても、「新教育課程の実践上」には、多様な問題が横たわっていることがわかる。単元の構成（主題の設定、主題への切り込み、教材の選定、教材の配列、目標言語事項）から単元の配列（一年間を見通した単元の配列）まで、

問題は多岐にわたる。

四年間の実践を積み重ねてきて、一つの区切りがついた感はあるが、我々は今原初的でいて、また新たな問題に立ち返っている。「国語Ⅰ」の性格にからんだことであるが、「中学校との関連を密接に持ち、国語の基礎的・基本的な能力を身につける科目である」としながらも、「国語Ⅰ」が必修であるという立場からすれば、それ自体完結したものでなければならない。では、「国語Ⅰ」でつけるべき学力とはどのようなものか、それに関連して、評価はどのようにすればよいか。来年度に向けて取り組みを始めたところである。

（広島大学附属高等学校教諭）